

塩見 昌紀

SHIOMI Masanori

本誌編集委員



編集委員のリレー執筆ということで、本誌にちなんで非開削にまつわる話を書こうと思うのですが筆が進みません。かといって日常の仕事のことだと愚痴っぽくなってしまわないかと不安だし、特技といっても、これといったものがなくて我ながら唾然とします。趣味も際立つものがなく、旅行も、ゴルフも何もかも中途半端です。

それで、しいてあげるとすると本が好きなことくらいなので、本の話から入ることにします。

生まれて最初に読んで夢中になった活字の本は「ひとまねこざる」シリーズだったと思います。当時から外国の絵本と

 思っていました。先ほどインターネットで検索すると“『ひとまねこざる』（Curious George）は、ハンスアウグストとマーガレットのレイ夫妻による絵本のシリーズである。”とあります。私

の両親の出自は農家であり、尋常高等小学校しか出ていないのに随分ハイカラな絵本を与えたものだと思います。自分の家族をほめているようで気が引けるのですが、母の実家は貧農であり義務教育以上は望めなかった環境にもかかわらず、向学心の強い女性だったようです。対して父は人付き合いの良い、無類の酒好きで陽気な男でした。私はどちらかというと父側の人間と思っていますが、程よく混合されているように思われて、とても感謝しています。

若い頃から、よく読んでいるのは司馬遼太郎ものです。「坂の上の雲」に描かれた、匂いたつような明治の空気や秋山兄弟に代表される明治の群像には特に強く惹かれるものがあります。司馬遼

太郎もので最初に読んだのは「燃えよ剣」でした。司馬先生には申し訳ないのですが、芥川賞の方が直木賞より格上と思っていた若い頃の私は、純文学を難しい顔をして読むのが読書と思っていたので、「燃えよ剣」を読んだのは、かなり遅めの25歳頃のことでした。当時の私は推進工事の現場監督が仕事でしたが、サキヤマのY氏に強く勧められて読み、たちまち司馬遼太郎のファンになりました。

Y氏は私より3歳くらい年上のマッチョな男でしたが、カエルが大の苦手でした。あるとき推進管の中で身動きできないY氏を発見しました。何をしているのかと思うと、カエルが一匹Y氏の前に立ちはだかっていました。蛇ににらまれたカエルというのは聞いたことがあるが、カエルににらまれた人間というのは初めてでした。そのカエルを追い払ったことからY氏が私に一目置くようになり、交友が始まりました。Y氏はマッチョな姿からは想像できない知的自由人で、彼の自宅にはハードカバーがどっさりあり、壁には「身はたとひ 武蔵の野辺に朽ちぬとも 留め置かまし 大和魂」と墨書された吉田松陰の辞世が掛かっていました。その後、私は工事の仕事から離れて、今はオペレータとして活躍しているY氏と一緒に仕事をすることはなくなりましたが、今も年に一度ほど会って旧交を温めています。少しだけですが、非開削にまつわる話でした。



吉田松陰辞世句碑（小伝馬町十思公園）